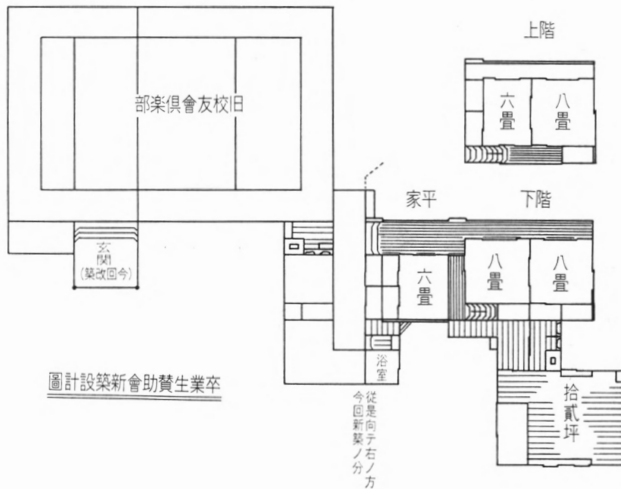


旧校友会倶楽部に接続して瓦葺二階建一棟、付属室二棟から成る卒業生倶楽部が新築された。これは開校満二十五年記念式に際し卒業生にして本校に在職する者三十名（白井雨山、和田英作らが中心）が他の卒業生たちに呼びかけて卒業生賛助会を作り、寄附金を集めて建設したもので、集会娯楽、地方在住卒業生の宿泊所等に使用されることになり、彫刻撰科卒業生後藤良がここに居住して管理することとなった。

六、旧校友会倶楽部の修飾

旧校友会倶楽部は総檜造り約百坪の建物で、ピゲロウが桜井敬



『東京美術学校校友会月報』第13巻第5号より。

徳阿闍梨のために建てたものを明治二十四年に岡倉覚三が本校校友会のために譲り受けて移築し、日本青年絵画協会第一回展をはじめとして多くの展覧会が開かれた由緒ある施設であるが、明治三十四年一月に至って校友会はこれを本校に寄附。以後会議室と称された。校友会は今回の式典に際して卒業生賛助会と提携し、校友会積立金より千五百円を支出して玄関を改造し、欄間を作り、格天井を張り、建具の不足を新調し、畳を入れ、敷物を敷き、電灯を備えるなどした。

七、記念植樹会

本校会計掛（主任高田松男）の発起により起こった会で、その呼びかけにより国内国外の職員や卒業生たちから樹木の苗や金員が送られ、校内各所に桜、檜、杉、樅、銀杏、桐等の苗木が植え込まれ、緑豊かな景観を呈することとなった。大正三年四月より同五年三月までの同会事業報告は『東京美術学校校友会月報』第十五巻第一号に同年四月より大正八年三月までについては同誌第十八巻第二号に掲載されており、購入樹木の種類、寄贈者、植付場所等々が詳しく記されている。

⑤ 岩村透の外遊（辞職、死去）

岩村透は明治三年一月二十五日東京生まれ。父は岩村高俊。岩村通俊、林有造を伯父に持つ権門の出身で明治三十九年に男爵となった。はじめ慶応義塾幼稚舎、同人社予科、青山英和学校で学び、明治二十一年渡米してキングストン市ワイオミング・セミナー美術科、ニューヨーク市ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン等で

学んだのち、同二十四年バリのアカデミー・ジュリアンに入学してアドルフ・ブグロー、ガブリエル・フェリエーのもとで絵画を修業し、その間にイタリアへ旅行。また、黒田清輝、久米桂一郎と知り合った。同二十五年帰国。翌二十六年より青山学院の図画教師となり、同三十二年東京美術学校西洋美術史授業嘱託（森鷗外の後任）となった。翌三十三年九月には依願解嘱となってパリ万国博に出かけ、翌三十四年二月に帰国して再び西洋美術史（九月より英語も担当）嘱託となり、翌三十五年四月に教授に昇格された。この間、明治二十六年に明治美術会評議員となり、翌二十七年から明治美術学校で西洋美術史を講じ、同二十九年、黒田清輝らに勧められて白馬会に入会。翌三十年十一月、岡倉覚三と対立して東京美術学校を辞職した大村西崖が『美術評論』を創刊するや久米桂一郎、森鷗外らとともにこれに協力し、同誌廃刊（三十三年三月）後は『美術新報』（小原大衛主宰。三十五年三月創刊）に協力し評論を展開した。

教授となった岩村は、明治三十七年セントルイス万国博の用務を兼ねて渡米し、欧州諸国を視察して翌三十八年帰国。以後、東京美術学校で名講義を続ける傍ら文展、博覧会等の審査委員をつとめ、また、著作に従事した。そして、大正三年に休職を願い出て四度目の西欧遊学（自費）に赴き、帰国後は復職することなく、同六年八月十七日に死去した。岩村の履歴書（本学蔵）の大正三〜六年の項の記載は次のとおりである。

〔大正〕
同三年三月三十日 六級俸下賜

同 文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職

ヲ命ズ

四月十一日 願濟ノ上向フ一ヶ年ノ見込ヲ以テ本日歐米ニ

向ヒ出發ス

九月廿九日 歸朝ス

同五年四月 七日 休職満期ノ處在官十三年以上ニ付年俸月額六

箇月半分下賜

同六年八月十七日

卒去

四度目の渡欧の動機について清見陸郎は『岩村透と近代美術』（昭和十二年。聖文閣）の中で次のように述べている。

抑々透の前回の外遊は、明治三十七年から八年へかけての事であり、爾來九年の歳月が閲されてゐた。その間フランスを中心とする歐洲の美術界は、新印象派の後を受けて後期印象派が勢ひを逞しうし、更にキュビズム、フュチュリスム、コンポジションナリズムと、矯激なる傳統



岩村透

破壊の新運動は次ぎ／＼と起つて、斯界はこゝに根本的革命の大波に揺蕩された。西欧の新風を追ふに急なるわが藝苑は、早くもこの傾向を敏感に受容したから、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、マチ

ス等の名は呪文の如くに、年少き美術學生の口の端にさへ上り、つい數年前までは畫壇の中堅的地位を占めた岡田三郎助、和田英作等の作畫も、一概にアカデミックとして新時代から背を向けられるやうになつてしまつた。

堅實なるクラシズムの好尚の上に立つ透は、固よりかゝる輕跳浮薄な一時的流行を喜ぶものではない。機會ある毎に、彼はこの新傾向に對して辛辣きわまる揶揄を浴びせかけた。しかも、よしさうしたいゝ意味での守舊的立場を守る批評家であるにしても、尙且つ彼の一番の弱みは、足久しく歐洲の地を踏むことなく、直接最新の運動に就いて目睹してゐない事だつた。

この意味からいつても、是非彼は一度彼地へ行つて來なければならぬと感した。それに病氣の方も、その後相變らず思はしくなく、その療養のためにも、海洋の空氣と全然米食から隔絶した西洋の生活こそ、最も望ましいものだつた。深思熟慮の末、彼は實に二週日の間に、この外遊の事を決したのだつた。旅費も他から仰がず、私金を以てし、たゞこのため滿一ヶ年の休職を美校に願ひ出て許された。

清見が指摘しているように、美術批評界の第一人者であつた岩村は、特に明治四十年代に入って高村光太郎などを筆頭とする若手批評家たちに地位を奪われつつあつた。文展のあり方に疑問を持つ若手画家たちにより、大正元年にはヒューザン会（斎藤亨里、岸田劉生他）が起こり、翌二年には文展の洋画部に第二部設置の運動（石井柏亭、有島生馬、山下新太郎ら。梅原龍三郎も協賛。大正三年二科会とし

て独立。）が起こつた。岩村は文展擁護の立場でそれらを批判したが、梅原や有島は、岩村は今のヨーロッパの美術界を知らず、若手の行動を批評する権利がないと非難したという。これは岩村にとって大きな衝撃であつたに違いない。また、岩村は糖尿病の持病があり、徐々に悪化し、神経にも影響が出て來た。かくて、批評界に於ける失地挽回と病氣治療のため出發したのであつた。

岩村は五月二十七日にマルセイユ入港。暫くパリに滞在し、六月中旬に英國へ渡つた。六月十四日に彼は『美術週報』の同人に長い手紙（前掲書所載）を寄せたが、その中で次のように述べている。

「美術學校の美術史講義の材料として、幻燈映畫を各方面に亘つて毎日撰擇してゐましたが、日々半日宛費して、漸く二三日前に終りました。全體で三千枚買入れました。此幾千枚といふ板がチャーインと出來合であるなぞも一寸驚くべき事ではありませんか。無論其内には最近の印象派なぞも這入つてをります。撰擇したものの内にも大分印象派のものがあります。今度こそは歸朝して、此完全な映畫で、素晴らしい講義をやらうと、今から腕が（否、口が）唸つてゐます。此元氣で、病氣の状態をお察し願ひます。呵々。」

「近頃出た『ロマンチック派より寫實派へ』といふ書物を買ひ、其各方面の精密な研究の出來てゐる處を見、自分が西洋美術史の講義などをやる其横着さに汗を流してゐます。好くも、西洋美術史の話なぞの出來たものかなと、大いに恥ぢてゐる譯です。ア、愈々眞面目な勉強がしたくなりました。所謂『勉強のしたい

時分に歳はなし』とでもいふ處でせう。」

岩村がこうした材料と新知見を以て再び本校の教壇に立ったならば、その名物講義は一層生彩あるものとなつたろう。しかし、帰国後、事態は思わぬ方向へ展開した。つまり、彼の渡欧に先き立って正木直彦校長は岩村の渡欧資金が潤沢でなかったため一旦俸給を引上げてから休職（俸給支給）とし、また、岩村が帰国する時分に開会するサンフランシスコ万国博の審査官に任命する内諾を当局に取り付け、学校の経済に余裕が出ればさらに援助することを約束した。正木は岩村が講義に使用していたスライドが明治四十四年の火災で焼けてしまったので新しいスライドを購入することも依頼した。ところが岩村は滞欧中に三女芙蓉が死去するという不幸に見舞われ、また、七月二十八日には第一次世界大戦が始まり、フランス全土がドイツ軍の侵入に備えて戒厳令下に置かれたため、予定を変更して半年足らずで帰国してしまった。これはやむを得ない変更であつて、彼が帰国したときの『国民新聞』（大正三年九月二十九日）の「^あ喜！無事帰国 安否不明の邦人廿四名熱田丸にて入港 今朝九時半新橋に著」という大見出し記事にある岩村の談話を読めばヨーロッパの情況は留学を続行しえないまでに悪化していたことが推察できるのであるが、にも拘らず、こうしたことは官僚の世界では大変不都合なことであつたらしい。そこで正木はともかく岩村の復職手続をとろうとしたが、当時の専門学務局長は、美術学校の学科の教員はなるべく講師に留め、その分実技教員の待遇改善を図るべきであるとし、また岩村のラディカルな内容の講演が官立学校の正教

員にふさわしくないとして復職を認めようとしなない。一方の岩村は講師では不満だと言う。そこで正木は他の教官との権衡を保つために俸給を少し下げ、受け持ち時間（岩村は病気を理由に十五時間の受け持ち時間を五時間に減らし、その分を森田亀之輔が補っていた。）をもつと増やすよう提案したところ、岩村は激昂し、本校との絶縁を宣言して一切の交渉を打ち切ってしまったのであつた。そして大正五年、彼は国民美術協会を動かし、あるいは自分の主宰する『美術週報』誌面を借りて痛烈な東京美術学校批判、正木攻撃を展開した。その発言は時には常軌を逸する激しさを見せたが、それはあるいは病のなせる業だったのかもしれない。翌六年には病勢悪化して急逝してしまつた。

大正六年十月十七日、上野精養軒で追悼会が行われ、その際岩村透男（男爵）記念美術講演開設の提案がなされ、満場一致で可決。翌七年五月、神田青年会館でその第一回が行われて以来随時開催された。岩村の墓は神奈川県三崎の本瑞寺に建てられ、昭和五年八月に同寺境内に朝倉文夫作の岩村透胸像が建立された。

なお、昭和十三年に至り本校は遺族より「岩村透原稿」の寄贈を受けた（現在東京芸術大学附属図書館蔵）。その内訳は次のとおりである。

「欧洲中世美術史講話手記」

「東京美術学校ニ於テ講述 三十二年—三十三年 復興時期 完」

「東京美術学校ニ於テ講述 三十四年—三十五年 フランス 完」

「三十五年—三十六年 英、西、普、蘭、独、絵画史 東京美術学校ニ於テ講述」

稿 完

「明治三十五年—三十六年 伊太利亞、仏蘭西彫刻史稿 完」
東京美術学校ニ於テ講述

「明治三十六年 独逸、英吉利彫刻史稿 完」

以上六冊は本校における西洋美術史講義のためのノートで、
罫紙に毛筆で記され、所々に朱字や英書からの抜き書きが付さ
れている。

「以太利建築史 原稿明治三十七年一月綴」

「草稿明治三十六年四月」

「草稿明治三十七年一月」

「原稿明治四十三年七月」

「原稿明治四十四年三月」

「原稿明治四十五年一月芸苑茶話」

「原稿大正三年十月」

以上七冊は『美術新報』等への掲載用原稿。罫紙に毛筆で記
されている。

「伊太利建築史原稿 完」

「伊太利彫刻史原稿 完」

以上二冊は『西洋美術史要 伊太利建築之部』（明治四十四年画報社）、
『西洋美術史要 第三編 伊太利彫刻之部』（同三十八年同）の原稿で、原稿用紙
に毛筆で記され、図版が添付されている。

手帖

明治四十二年のメモ帖と、大正三年渡欧期のメモ帖各一冊。

台東区立朝倉彫塑館には岩村透旧蔵書約二千部が収蔵されてい

る。大部分は洋書である。これは本校で岩村の薫陶を受け、岩村を
恩師として尊敬していた朝倉文夫が、古本屋から買い戻すなどして
収集し保管したもので、その内容については田辺徹著「朝倉彫塑館
の蔵書」（『朝倉彫塑館の記録』昭和六十一年。財団法人朝倉彫塑館）にお
いて紹介がなされている。

⑥ 鶴田機水死去

本校助教教授鶴田機水（図画師範科日本画授業担当）は大正三年五月
二十八日に病死した。機水は本名幾太郎。明治七年に山梨県東八代
郡石和町に生まれ、同二十八年九月本校に入学。同三十三年日本画
科を卒業して研究科に進み、翌三十四年四月千葉県成田中学校教諭
となったが十月に辞職し、川端玉章、荒木寛畝、山名貫義について
日本画を研究した。同三十六年九月に本校西洋画科に入学。翌三十
七年四月には本校雇（助教）を命ぜられ、三十八年十二月に助教授と
なった。雪舟に心酔する一方、西洋画の技法も研究するなどして研
鑽を続けたが大成する前に死去した。『東京美術学校校友会月報』
第十三巻第二号に屋代鈇三の追悼文と図画師範科錦巷会員、本校生
徒らの追悼文、および機水の肖像写真、スナップ写真等が掲載され
ている。葬儀は谷中天眼寺で五月二十九日に営まれ、郷里の先塋の
側らに葬られた。翌大正四年五月、知友による追善画会が上野松坂
屋で開かれた。これについて『東京美術学校校友会月報』第十四巻
第二号には次のように記されている。

○鶴田機水氏追善畫會 東京美術學校日本畫助教教授にして、雪舟